

金 龍 范*

韓国キリスト教会の延辺朝鮮族自治州における宣教活動とその意図

1. はじめに
2. 延辺朝鮮族自治州におけるキリスト教の現状
3. 延辺における宣教活動の前提条件
4. 韓国キリスト教会による中国朝鮮族宣教の意図と戦略
5. 韓国キリスト教会の宣教方針と問題
6. 終わりに

1. はじめに

中国延辺朝鮮族自治州には多くの韓国人宣教師が入り、活動していることが知られている。延辺で韓国人宣教師の支援を得て本格的宣教活動が始まり、信者の数が順調な増加をたどったのは中韓国交締結(1992年)後のことである。中国の朝鮮族は韓国人との盛んな民間交流を通じて民族文化のリバイバルを図り、韓国人の資金援助を受けて各種の民族学校やキリスト教会を建設し(韓景旭、2001、103頁)、多くの韓国宗教人は同胞が多く住む延辺で活動している。またよく知られているように北朝鮮からの脱北者を支援しているのも、これら韓国キリスト教会(以後、韓国教会)の関係者で、彼らは朝鮮族キリスト教会(以後、朝鮮族教会)が回復し、宣教として成長し、中国宣教と北朝鮮宣教の重要な役割を担うことができるように勤めている。中国における韓国の存在が大きくなるにつれ、韓国人と同じ民族として中国の朝鮮族も宗教、経済、文化など諸方面で変容を迫られている。

現在中国延辺における韓国教会の宣教活動は

どの国、地域よりも活発である。この現象は他の地域では見ることができない。本稿では、中国における近年の目覚ましい韓国教会の浸透ぶりに注目し、この韓国教会による中国朝鮮族宣教の意図と宣教の方針について、韓国人宣教師など教会関係者へのインタビューや各種文献をもとに整理し、考察を加えてみたい。

2. 延辺朝鮮族自治州におけるキリスト教の現状

現在の中国朝鮮族教会はかつての中国満州朝鮮人教会の延長線上にあると考えてよい。18世紀末にヨーロッパとアメリカの勢力が拡張されるにつれ、プロテスタントとカトリックが朝鮮で信仰されるようになった。19世紀中葉以後、朝鮮人は上述の各種の宗教を携えて満州(現東北地域)に移住してきた(《延辺朝鮮族自治州概況》編写組編、1984、217頁)。

中華人民共和国成立以後、中国共産党はキリスト教会に対する「三自愛国運動」政策を通じて、教会支配を進めていった。「三自愛国運動」とは「自養」、「自治」、「自伝」を示す。「自養」は帝国主義からの財政援助を拒絶すること、「自治」は帝国主義教会の統治から独立すること、「自伝」は教会が帝国主義の要素を除去することである。さらに、1961年前後からは反右派闘争、整風運動、大躍進¹⁾など一連の政治運動の影響で、朝鮮族は外国との関係を断絶され、三自運動に反対する教会指導者が排斥された。文化大革命期には、キリスト教に「反右派闘争」時と同

*中部大学大学院国際人間学研究科博士後期課程

じような抑圧が加えられ、紅衛兵の武闘²⁾の対象にもなったことで、その被害は一層深刻なものとなった。

1976年の毛沢東の死亡と四人組³⁾の失脚後、鄧小平が登場し、中国キリスト教の新時代が開かれた。教会の再建が始まったのは1979年からである。1979年、中国政府の改革開放政策が実施されるとともに宗教政策の見直しが行われ、信教の自由を保障し教会を保護する政策がとられるようになった。そして13年間閉ざされていた中国宗教事務管理局が業務を始めた。『中華人民共和国憲法』(36条)には、「中華人民共和国の公民には信教の自由が保障され、いかなる国家机关、社会团体、または個人も公民に信仰を強制し、宗教団体を強圧してはならず、信者を差別してはならない。国家は正常な宗教活動を保護する」という法律がある(韓景旭、2001、112頁)。

この規定に従って、没収されていた教会が返還され多くの人々が三自教会に礼拝をするようになった。教徒はそれ以前には、「キリスト教徒である」と明言することができなかった。この時期、家庭教会が再登場し、秘密集会が開かれ、巡回伝道者が宣教するようになった。三自教会に従わない教徒は、文化大革命期間中に逮捕され、その後釈放された聖職者を各家庭に招き、教会ではなく家庭において信仰活動を行った。これを「家庭教会」と呼んでいる。この家庭教会の活動は人々の間に広まり、1980年代初めまで、政府に大きな干渉を受けなかった。このようにして教会に対するゆきすぎた干渉の中で「三自神学」の観点に反対するキリスト教徒らが家庭で礼拝したのが家庭教会の起源であると思われる。

現在、延辺朝鮮族自治州の朝鮮族が運営する三自教会は急速に成長している。延吉市には改

革開放後、教会は「延吉教会」一つしかなかったが、現在、延辺朝鮮族自治州には、宗教を信仰する者が約4万名おり、人口の約25%を占める。主な宗教はプロテスタントが2万8千名、カトリックが3千名、仏教が4千名、イスラム教が5千名である。許可された宗教活動場所は全体で221ヶ所、プロテスタント教会が86、活動場所が111、カトリック教会が14で、活動場所が5となっている。その他に家庭教会が多数存在している(潘龍海、2001年、142頁～143頁)。

聖職者数は186名で、牧師が3名、長老13名、宣教師4名、伝道員139名である。カトリックは神父が1名、シスターが2名(潘龍海、2001年、142頁～143頁)、その他に延辺で宣教活動を行っている韓国人は相当数に上るとされる。

延吉だけでも延吉教会、民主教会、公新教会など十数ヶ所の教会があり、これら政府から認められた三自教会である。その他非公認の小さい教会もいれると50ヶ所以上存在する。現在、韓国教会は直接朝鮮族に信者を入信させることはできない。そのため韓国人の宣教師は直接宣教せず、自分の模範的生活や行動で影響を与えて、伝道する人も少なくない。

延辺には現在、多くの韓国人が居住しているが、韓国人用の教会は1つしかない。これは延辺科学技術大学の中にある教会である。この大学の創立者の金鎮慶総長は韓国系アメリカ人で、主に韓国人の寄付によって大学運営は支えられている。そして、この学校の設立に力を注いだ人々には、キリスト教徒の人々が多いとされている。韓国人教員も80%近くを占め、その家族を含めると相当な人数になる。そのため学校は政府から許可をもらって教会を建て、大学関係の韓国人が教会に通うようになった。学校の理念として挙げられた「真理・平和・奉仕」も

キリスト教的色彩が強い。

3. 延辺における宣教活動の前提条件

上述のように改革開放後に朝鮮族は他の民族より一步先んじてキリスト教を広範囲に受け入れるようになった。これにはいくつか前提条件があったと考えられる。それらの条件について詳しく検討してみたい。

第一に、中国朝鮮族と韓国人との接触機会の増大である。朝鮮戦争後、延辺と北朝鮮との関係は維持され、親戚訪問などの交流が続いていたが、韓国との国交が開けてからは、韓国との経済的な関係を通して、歴史的な背景と民族の紐帯が再認識されるようになった。

朝鮮戦争(抗米援朝)以後の冷戦期、その後の韓国の浮上と北朝鮮の沈下といった国際的状況が延辺朝鮮族にとって民族と国民をめぐるアイデンティティーに大きな影響を及ぼしており、又これに伴う朝鮮族社会に深刻な変容をもたらす可能性がある。

延辺の朝鮮族社会の間で韓国の状況が関心を呼ぶようになったのは、韓国の目覚ましい経済発展と、それに伴う韓国の国際的な地位の上昇に負うところが大きい。改革開放政策のもとでの経済の活性化に加えて、中国と韓国との国交回復は、延辺の朝鮮族社会に大きな転換をもたらしてきた。在外僑胞の中でも延辺の朝鮮族は、韓国にとって大陸中国への経済進出の新しい拠点として一躍重大な関心を呼ぶこととなった。韓国系企業の中国への進出に伴い、朝鮮族が従業員として大量に採用されるようになったのに加えて、韓国企業の駐在員や観光客や韓国留学生が急増し、これらを対象とする韓国料理店・酒場・カラオケ・サウナなども急増し、また駐在員家族を対象とする家政婦や中国語の家庭教

師など、いずれも以前はほとんど考えられなかった関係が大量に発生したのである。このため、ほとんど誰にでも韓国人に接触する機会が開かれていった。

第二に、親族・血縁関係の存在と頻繁な往来である。延辺朝鮮族は歴史的にさまざまな原因で朝鮮半島から中国の東北地域に移住してきた。彼らは民族的にも、血縁関係においても朝鮮半島の人々と深い関係があり、一部の人の直系親族は今日も韓国や北朝鮮に住んでいる(全信子、2004、191頁)。朝鮮戦争後、中国朝鮮族は、北朝鮮と緊密な関係にあった。現在でも北朝鮮にいる親戚との往来は盛んであるが、1992年8月24日の中韓国交樹立後、北朝鮮は中国人観光客や朝鮮族の北朝鮮への親戚訪問を制限している。それにとって替わったのは韓国であり、韓国との往来は急激に拡大してきた。特に、韓国系企業の中国への進出に伴い、中国の親族が大量採用されている。

また、韓国企業の駐在員や韓国留学生は、現地の朝鮮族との結婚も多くなって、新しい親族関係と血縁関係が作り出されている。1992年の中韓国交樹立に伴って、延辺朝鮮族と韓国人との国際結婚は急増する。1992年には、42件、1995年には2,012件、ピークの1997年には2,898件にのぼっている。そして、1991年から2001年延辺朝鮮族と韓国人との国際結婚は13,881件であり、延辺国際結婚総件数の91.1%を占めている。それに対し、韓国以外の外国人との国際結婚はわずか9%である(林明鮮、2004、209頁)。こうした国際結婚から見てみると、延辺の朝鮮族と韓国人との国際結婚には、国籍は異なるが同じ言語・習慣を共有する朝鮮民族集団の内婚であり、「故郷」への帰郷なのである。このような特別な縁で朝鮮族と韓国は結ばれており、両

者の往来も非常に盛んである。

第三に、「故郷」についての感覚である。韓国は延辺地区を自民族の「故郷」と考える傾向があり、その一方で朝鮮族の韓国訪問を韓国では「在外僑民の帰郷」と伝えることが多かった（鄭雅英、1999、316頁）。

延辺では改革開放の進んだ今日でも、朝鮮族にとって「祖国観」問題は極めてナイーブな部分を含んでいる。調査によると、南北いずれかの朝鮮を「祖国」と認識する者がまだ存在し、朝鮮族の民族意識が残されている。延辺在住の朝鮮族と韓国人は、法律的に国籍は互いに異なるが、社会的・文化的には同じ民族である。このように中国朝鮮族は中国の少数民族の一つとして、中国以外に自民族の独立した国家を持っているということ、そして、その国家が移住前の原籍であるということにおいて、他の少数民族と異なり、同じ民族である韓国、北朝鮮との関係が必然的に彼らを大きな影響を及ぼしており、また朝鮮族社会に深刻な変容をもたらす可能性もある。

第四に、前節に述べた中国政府の宗教政策の転換があげられる。1979年、中国政府の「改革開放政策」が実施されるとともに宗教政策の見直しが行われ、信教の自由を保障し教会を保護する政策がとられるようになり、宗教政策が穏健な路線になった。中国のキリスト教政策がこのように変化をした主要因は以下のように示されている。①社会主義と共産主義が長期間経過し、発展すると、宗教は自然に消滅する。そして、過去一度に宗教を抹殺するような方針と考え方は問題である。②宗教が大衆性を帯びてきたために残酷な迫害は国の安全と民族の団結及び国際交流に莫大な損害を招来する。③過去に宗教界の人士及び信徒らは暴力的な宗教政策

を受けた結果、かえって宗教活動が秘密裡に成長発展し、反共分子らが利用する条件になる。

④現在の基本任務は人民が団結して四つの現代化を促進することである。それゆえ信徒と非信徒に思想的距離を置く政策は両者の乖離感が強くなり、かえって宗教に対する偏向が加熱する。

⑤宗教界が外国関係を持っているために、国際政治上非常に大きな意義と影響が存在する（潘龍海、2002、426頁）。以上から見ると、中国共産党は統一戦線の一環としてキリスト教に制限を加えながら宗教の自由をある程度の範囲内で許可している。

主に以上の四点が、中国の他の民族より一歩先んじてキリスト教を広範囲に受け入れるようになった前提条件であったと考えられる。

4. 韓国キリスト教会による中国朝鮮族宣教の意図と戦略

中・韓国交樹立以来、延辺朝鮮族教会は新局面をもたらし、多くの韓国人宣教師は同胞が多く住む延辺で活動している。このような活動を行う意図はそもそも何なのであろうか。本節では筆者が実地調査で得た資料を基に、韓国人宣教師の考える、中国朝鮮族宣教の意図と戦略について検討してゆきたい。

韓国人のある「中国宣教」研究者は、中国における宣教について以下のように述べている。

「中国の200万以上の在中共胞が暮らしているのは、明らかにイエスの計画していた恩恵です。中国の延辺朝鮮族はイエスが中国と北朝鮮の宣教のために準備してきた切り株です。中国宣教では朝鮮族教会は宣教の対象だけではなく、宣教の協力者なのです。イエスは彼らを通じて、中国の福音の普及を成し遂げようとしており、さらには北朝鮮の福音も成し遂げるように願っています。そし

て、韓国教会はどうすれば、延辺朝鮮族教会を宣教する教会になれるのかを考えています。そして（韓国教会は）朝鮮族教会と協力して中国の漢族と少数民族の宣教を進め、北朝鮮の宣教も続けて協力するのも望んでいます。」（筆者インタビューによる、2004年2月）

ここから分かるように韓国の中国宣教の戦略は、中国朝鮮族と協力して、北朝鮮と中国への福音の普及を成し遂げることも視野に入れている。韓国人宣教師は朝鮮族教会が回復し、宣教を行う教会として成長し、中国宣教と北朝鮮宣教の重要な役割を担っていると考えられている。韓国キリスト教会の宣教師が、異なった社会体制下に生活する延辺の同族社会に進出する韓国教会の真の狙いは、北朝鮮との南北統一を視野に入れているのではないと思われる。韓国人は延辺朝鮮族が北朝鮮の国境に位置する利点を生かし、韓国と北朝鮮の民族和解の架け橋になると考えている。また解放前に朝鮮半島から延辺にキリスト教が伝来したが、朝鮮半島が分断された後、韓国宣教師は北朝鮮の宣教を、唯一北朝鮮に親戚訪問、旅行することができる中国朝鮮族に託している。

次に、図1中の(1)～(4)の宣教活動について、その意図と戦略について考察したい。

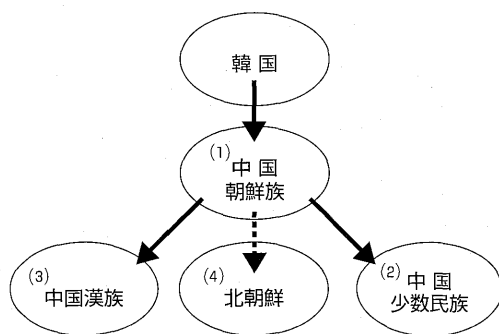


図1 韓国系キリスト教会の宣教意図と戦略

(1) 延辺朝鮮族への宣教

中国朝鮮族は韓国教会の特別の関心対象になっている。同じ民族に福音を伝える動機と目標があるためだけではなく、北朝鮮地域と中国への宣教の関心があるためである。朝鮮族宣教は韓国教会が中国と北朝鮮の宣教を行うためにきわめて重要である。韓国教会は、朝鮮族の宣教が成功すれば中国宣教と北朝鮮宣教の拠点が確保でき、宣教の協力者を得るなど大きなメリットがあると考えている。しかし、失敗すれば中国宣教と北朝鮮宣教の協力者を同時に失ってしまうとの説もある。したがって、韓国教会にとって朝鮮族宣教は韓国の中国と北朝鮮宣教の成敗に大きな影響を与える課題である。

このような宣教はどのように行われてきたのだろうか、たとえば、1994年、ソウルで韓国滞在中の中国朝鮮族のための「愛の家」を運営する宣教団体などが彼らに宣教した結果、大部分の人がイエスの教えを受け入れた。また、韓国で信じなかった人たちも中国延辺に帰国して、信仰生活をしている人も多いということである。また、他の教会は毎月一回、韓国に出稼ぎに来た中国朝鮮族に、バスによる一日コースの観光を提供し、その場を利用して宣教したが、かなりの人が福音を受け入れたという⁴⁾。このような多くの韓国宣教団体や教会などが中国朝鮮族に福音を伝えて、実りを結ぶ経験が多いことから、韓国教会の朝鮮族への宣教が可能であることが理解されるようになった。

上記のように現在韓国教会が中国宣教をあえて行うのは、朝鮮族が比較的容易に宣教を受け入れ入信させることができるためである。さらに彼ら朝鮮族は中国に福音を普及するための韓国教会の良いパートナーであると考えられている。また、韓国人宣教師らも中国朝鮮族が単な

る宣教対象ではなく、北朝鮮と中国への宣教の主力にできることを理解している。したがって韓国の教会は延辺にもっとも注目し、資金の投入も惜しまないのである。

(2) 中国少数民族への宣教

中国朝鮮族は主に中国東北地域に他の少数民族に混じって一緒に暮らしている(表1参照)。

現在、朝鮮族は、中国諸民族の中に融けこんでいるだけでなく、他の民族との関係も非常に深く、互いの交流も十分に問題なく行われている。中国の少数民族集住地区は、国境沿いの戦略的・軍事的要所に位置し、領土保全や国防問題にかかわる危険があるため、一部の少数民族の間で強い影響力を保持していたキリスト教勢力に対して、中共は「自治・自伝・自養」の三自革新運動を展開し、宗教の自由は「保障」するが、外国人宣教師及び列強諸国の影響力は徹底的に排除した(松村義久、2000、91頁)。また、中国政府は文化大革命の時期、地方民族主義を反革命主義と断定して、封建性遺物と旧習を打破し、民族主義を排撃した。資本主義が持っている非生産性知識の排撃と無産階級革命路線の主張などを朝鮮族からはじめ少数民族の文化を全面的に破壊するだけではなく、知識人である民族指導者を処刑し、弾圧した(鄭雅英、1999、232～233頁)。

このような教育軽視と暴力破壊の風潮の蔓延した結果、多くの少数民族は苦痛を受けた。文化大革命の傷あとのため漢族と少数民族に間の

葛藤は深くなった。その一方で、中国朝鮮族は他の民族と同じ中国の少数民族として、漢族よりも他の少数民族との関係はより親密である。そして、中国朝鮮族は長い間中国で生活した結果、中国朝鮮族は漢族が支配している中国で生活するため、民族内部で親密なネットワークを形成している。こういう点で、漢族が中国少数民族に対して行う宣教活動にとって、朝鮮族による少数民族の宣教は容易であると考えられる。

現在、朝鮮族教会は少数民族に対する宣教活動をしていない。しかし、朝鮮族教会が少数民族宣教に対して、無関心とは言えない。朝鮮族教会の中には、少数民族宣教に関心を持つ教会もある。そして、偶然に少数民族宣教活動をする教会もある。たとえば、ある朝鮮族宣教師が宣教している漢族家庭教会には満族教会を設立し、福音を普及した例もあるし、朝鮮族と混住しているほかの少数民族が朝鮮族教会に通うのも珍しくない。

しかし現在、中国朝鮮族教会だけで少数民族宣教をする際にはまだ、解決が必要な問題があるとされ、朝鮮族が少数民族の宣教のために、宣教の訓練と韓国教会の指導と財政後援が必要である(イン・ビョンクク、1997、233頁)と考えている研究者もいる。

(3) 漢民族への宣教

韓国教会はキリスト教社会の一員として、中国が韓国キリスト教によって新たな開墾地になると考え、宣教の戦略として中国への宣教に積

表1 延辺各民族の人口統計表

民 族	朝鮮族	漢 族	満 族	回 族	モンゴル族	他の民族
人数(名)	815,212	1,134,746	46,067	5,880	872	255
人口比率(%)	40.69	56.65	2.30	0.29	0.04	0.01

『延辺朝鮮族自治州志』 279 頁より作成

極的に参与している。また奉仕や啓蒙による社会改革を通して、キリスト教の精神に基づく理想社会を目指すものと考えられている。その際に漢族と混住しており、親密な関係を持つ中国朝鮮族にこの間族への宣教を託している。

中国朝鮮族教会は現在、近隣にある漢族教会に宣教する場合が多い。「三自教会」よりも「家庭教会」が漢族宣教により積極的である。現在、朝鮮族教会は漢族教会より発展している。漢族教会と比べることができないほど朝鮮族の教会の規模は大きい。漢族は朝鮮族より人口が多いが、漢族教会が朝鮮族教会より成長が早いとは言えない。

中国朝鮮族教会が漢族に宣教することができる条件は以下の通りであると考えられる。

① 中国語の能力

福音はコミュニケーションを通じて伝えるものである。コミュニケーションは主に言語を通じて成し遂げられる。したがって他文化圏の宣教では、基本的な宣教の力量は、宣教対象地域の言語能力に左右される。

中国朝鮮族は、中華人民共和国建国時に最も教育の普及していた少数民族であり、さらに高等教育の普及の程度も他の少数民族を圧倒している。中国朝鮮族の中国語の能力は彼らが受けた教育と深い関係がある。朝鮮族高校を卒業した人は中国語の能力が優秀である。漢族高校を卒業した人はより優秀である。大学を卒業した朝鮮族の中国語の能力は抜きん出ている。そして、中国朝鮮族の中国語の能力は居住地とも深い関係がある。延辺の朝鮮族より、他の漢族と混住している遼寧省や黒龍江省の朝鮮族の中国語能力が高い。

朝鮮族教会の宣教師の中には漢族より中国語が流暢である人が少なくない、中国語だけでは

なく、他の少数民族の言語も非常に上手な人が少なくない。

② 漢族との交渉能力

中国語が流暢なだけでは、宣教することはできない。宣教する現地の人々と交流する能力が言語に劣らない重要性を持つ。中国朝鮮族の宣教師は漢族や他の少数民族と交流し、交渉する能力が優秀である。この点は中国朝鮮族が漢族文化に同化していたり、或いは中国朝鮮族の衣食住が漢族式に変化していることから生じる部分もある。朝鮮族と漢族とのコミュニケーション能力は朝鮮族が漢族文化に対する適応能力と関係がある。朝鮮族は朝鮮文化を維持し、存続することを基本とする一方で漢族文化の影響も受けている。

③ 漢族宣教における朝鮮族の役割

中国では三自教会、政府、宣教師の間の摩擦があると宣教は困難になる。政府が過去の宣教師に対するイメージが悪く、外国宣教師の入国と宣教活動を許可していない。そのため三自教会も宣教師の入国を許可しなかった。政府が宣教師の入国と宣教活動を許可しないため、宣教師は中国で宣教活動が制約されることが多い。それに対し、朝鮮族の家庭教会が漢族の宣教をした場合、外国人の宣教師が宣教するよりも政治摩擦がないのである。朝鮮族の宣教師は中国国籍を持っているため、外国人の宣教師ではない。また朝鮮族の宣教師は漢族と似た考え方をもち融通性がある。法的にも外国人宣教師が宣教すれば違法であるが、朝鮮族なら違法ではない。

朝鮮族教会の宣教師が漢族の宣教を行うと、トラブルも起きにくい。朝鮮族と漢族は仲がよい関係を維持している。中国の延辺朝鮮族自治州の人口構成比からみると漢族が多くなってい

るが、一般に朝鮮族に対して民族差別はない。

中国は人間関係が重要であり、人間関係がある意味で法律を超越する。朝鮮族家庭教会の宣教師は政府各級幹部や有力者との人脈を積極的に活用し、良い関係を結んでいる。特に朝鮮族教会の宣教師の親戚や知人が宗教管理員の場合、教会をうまく運営するのは容易である。

(4) 北朝鮮への宣教

朝鮮半島は朝鮮戦争によって一つの国が二つに分断されたが、韓国は憲法で朝鮮半島全域を領土とうたい、北朝鮮からの亡命者も広義の意味での「国民」として受け入れる方針を取っている。また、韓国人宣教師らの救援活動がまた続いている。彼らは中国の朝鮮族と同じ民族であるため、脱出者救援の活動に関心であることを許されないからである。中国の朝鮮族教会は、北朝鮮を宣教する使命を持っていると韓国教会は考えている。

北朝鮮は社会主義国家としてマルクス、レーニン主義の宗教観に立脚し、「宗教は麻薬である」、「科学的社会主義を実現するため、有神論の打破は必然である」と強調し、宗教を消滅する政策を採ってきた。70年代後半には、国際革命の力量を強化するため、宗教団体を復活して国際支援を確保するようにした(車光文、2000、40頁)。

平壤には1988年に建てられたポンス教会とチャンチュン聖堂、1989年に建てられたチルコル教会がある。1992年には金日成の母親(康盤石)の名前を乗った盤石教会もある。1976年と1979年には妙香山に仏教寺院も復元し、宗教の自由があるように装っている。しかし、これは北朝鮮内部の宗教政策が転換したことを意味しない。これは単に政治的な必要から外部に向けた宣伝活動であった。1990年代、北朝鮮は社

会主義制度の崩壊と経済危機に陥っている。経済危機と国際社会における孤立状態を脱するため、宗教団体を対外交渉団体として、海外の宗教団体の支援を求めたこともあった。このように北朝鮮の宗教団体は北朝鮮統治者の政策に順応する宣伝道具であると言っても過言ではない(車光文、2000、41頁)。

近年、北朝鮮は深刻な経済困難を解決するため、多くの関係を通じて経済援助を要請している。南北正常化会談後、経済、文化面では活発な交流が行っている。このような交流を基盤とした北朝鮮宣教の道が広がっている。

南北正常化会談以前、北朝鮮宣教は第三国を経由して北朝鮮を訪問し、宣教活動が行われた。また国際救護団体と南北経協は救済活動をしながら非公式的に北朝鮮宣教を行ったとされる。またラジオ放送宣教や北朝鮮脱北者に対する宣教が行われた。

北朝鮮は1997年から数年間旱害に苦しんだ。また国際社会から孤立されたため、国内の経済は破綻し、多くの国民は亡命した。この時期(1996～1998年)には、北朝鮮の政府も国民に、通行証なしで地域で食糧を調達することを容認し、中国政府も脱北者を逮捕しなかった(車光文、2000、41頁)。中国の少数朝鮮族教会も注意しながら北朝鮮宣教を模索してきた。しかし、それらの宣教は極めて微々たるものであった。これまで中国の朝鮮族教会では北朝鮮に対する宣教の使命については議論が多かったが、具体的な方針は取扱わなかった。それなら朝鮮族教会はどうすれば北朝鮮宣教に貢献し、韓国教会はどのような役割を果たすのか。主に韓国教会は次のような二つの方法を考えている。

- ① 中国の朝鮮族三自教会と北朝鮮キリスト教徒との交流

中国朝鮮族三自教会は北朝鮮キリスト教徒との交流と協力ができる。中国の朝鮮族三自教会と北朝鮮のキリスト教徒との共通点が多い。同じ社会主義国家にある教会という点、また、今までも共産党政府の公認を受けた教会という点は両教会が交流と協力の道を開けることのできる共通部分である。

韓国教会は朝鮮族三自教会と協力して、北朝鮮のキリスト教徒との交流の道を開けるようにする。もちろん韓国教会は単独で北朝鮮キリスト教徒と交流するように努力しているようである。しかし、北朝鮮キリスト教徒との交流は様々な機会を活用するという点で有益である。特に韓国教会は北朝鮮キリスト教徒との交流にはさまざまな問題があるが、中国の朝鮮族三自教会と北朝鮮のキリスト教との交流は政治的摩擦が少なく、交流と協力の道を模索するためには有益であると考えている。

両教会の協力のためには、まず交流を始めることが必要であるので中国の朝鮮族三自教会に北朝鮮キリスト教との交流を提議するべきであるとする意見がある。中国の助力が切実な北朝鮮にとって、朝鮮族三自教会との交流の提議を無条件に拒絶することができない。この時朝鮮族三自教会は、北朝鮮のキリスト教徒が好感を持つような内容で交流する」ということである。

中国の朝鮮族三自教会と北朝鮮キリスト教徒の間の交流が始まったら、次の段階は相互間に信頼を構築することが必要である。北朝鮮と北朝鮮キリスト教徒は中国朝鮮族の三自教会との交流が有益だと確信を持つようにする。両教会間に信頼が構築したら、次の段階は宣教協力の準備が必要であると考えられている。

② 北朝鮮の亡命者に対する宣教

現在中国では北朝鮮からの亡命者が多く、亡

命者は命をかけて中国東北三省と中国全域を放浪している。彼らは教会に行けば生きていけることを知っており、北朝鮮の亡命者らは自らの生死を掛けている状況であるために、福音を受け入れる可能性が高い。したがって、中国朝鮮族教会は亡命者を救済・宣教し、北朝鮮と関係する仕事もしている。例えば、韓国の人が延辺あるいは北朝鮮に離散した父母兄弟や親戚を探したり、北朝鮮と韓国親戚の手紙を仲介してあげたり、韓国人が北朝鮮の親戚を援助する食糧や生活用品、医薬品などを北朝鮮まで送ることなどである。ただし、臨時に援助することはできるが、持続的に援助するのは財政上の能力が不足している。したがって、韓国の教会は朝鮮族教会と北朝鮮の亡命者を救済することが必要であると、韓国キリスト教関係者は認識している。

しかし、中国政府は、北朝鮮からの脱出者を「難民ではなく違法越境者」という見方を強調している。ここで注目されるのは、政府が外国の宣教師の入国と宣教活動を許可しないため、外国人の宣教師が彼らに宣教すると政治的な摩擦が発生する可能性が高くなる。このため今後とも中国で展開される宣教活動に注目していく必要がある。

5. 韓国キリスト教会の宣教方針と問題

韓国教会はさまざまな方法と機会を活用し、朝鮮族宣教を成功し、成長するように努力してきた。それを通じて宣教方針を模索している。それらの方針は朝鮮族教会が健全な教会になり、宣教する教会として成長するには大きな効果と効率を発揮するとみられる。ここで韓国教会の方針に注目し具体的に考察する。

(1) 韓国キリスト教会の宣教方針

韓国宣教師の中には次のような認識がある。「朝鮮族教会を健康な“土着教会”にするのは朝鮮族教会を育成する際の要点である。“土着教会”の育成は、まず育成の目標を設定し、育成の目標を達成するために、方針を模索しなければならない」ということである。

朝鮮族教会を育成するのは、韓国教会が中国に対する宣教の成敗と将来を左右する重要な課題であると考えられている。また朝鮮族教会を育成するために、以下のような育成の目標を設定することが必要であるとされている。

第一に「土着朝鮮族教会」の育成である。すなわち、自養、自治、自伝する教会にならなければならないと考えられる。朝鮮族教会の中の三自教会は、「自養、自養、自伝」の三自スローガンを表明したが、朝鮮族教会（三自教会、家庭教会）がほとんど自立できていない。すなわち、朝鮮族教会が教会の建設や宣教師の生活費、そして教会の運営費を自ら負担できず、ほとんど韓国教会の資金援助を受けて運営している。しかし、このような宣教方針では朝鮮族教会は永遠に自立できなくなる。したがって、朝鮮族教会の財政状況が貧弱であるのは事実であるが、韓国教会からいつまでも教会の運営費や宣教師の生活費、教会の建築費など援助を受けるのは不可能である。したがって、朝鮮族教会が自養、自治、自伝するように育成するのは、最優先の目標であると考えられている。

第二に宣教を行う朝鮮族教会の育成である。朝鮮族教会の存在価値は朝鮮族の宣教はもちろん漢族、少数民族、また北朝鮮の宣教するためであると考えられている。朝鮮族教会は中国宣教と北朝鮮宣教を充分になし得る潜在力を持ち、中国宣教に非常に重要な存在である。現在朝鮮族教会の一部が中国宣教と北朝鮮宣教をし

ており、またこれらの朝鮮族教会の周りには多くの漢族が住んでいる。朝鮮族宣教師は漢族に対し宣教した結果、多くの漢族教会が建てられた。そのことを通じて朝鮮族宣教師は漢族宣教師を訓練している。また、相当数の漢族教会は、独自の教会の建物を持っていない。自らの教会建物が無い漢族教会は、大体日曜日の午後に朝鮮族教会の建物を借りて礼拝を行なう。あるいは、信者の家を借りて礼拝を行うこともある。

第三に協力できる教会の育成である。朝鮮族教会の協力がなければ、韓国教会の中国への宣教はもちろん北朝鮮への宣教も不可能である。現在、朝鮮族教会が未熟であるのは事実であるが、朝鮮族教会を宣教対象としてだけ見るならば、朝鮮族教会は永遠に立ち上がることができず、韓国教会も重要な中国宣教と北朝鮮宣教の基点を失ってしまう。

中国朝鮮族の72%は北朝鮮出身であり（1984年第3次人口普查による）、中国朝鮮族と北朝鮮の交流はどの国、地域よりも活発である。この交流は国家間の政治、経済、文化だけではなく、親族訪問など民間交流も活発である。こうした中国延辺の朝鮮族と北朝鮮の人々の親密な関係から、延辺が北朝鮮の脱北者の主な拠点となった。こうしたことから韓国教会関係者は、中国朝鮮族教会は北朝鮮への宣教が十分可能であると考えている。

(2) 朝鮮族宣教の問題

しかし、韓国教会は朝鮮族宣教に対して望むほど良い成果を得られなかったと言われることもある。その原因は以下のようなものである。

まず朝鮮教会の状況への理解が不足しているという点である。中国朝鮮族の民族意識は漢民族と分離していたが、国家意識としては漢族と同じ中国である。韓国教会の人は中国朝鮮族教

会を韓国教会の延長と思って、中国教会だと認識しない人が多い。

次に韓国教会は中国政府の認めた三自教会だと交流していることである。それによって小さな教会に影響を及ぼすことができなかった。

また朝鮮族教会の育成に対する韓国教会の指導が不足しているという点と、韓国教会間の競争が続いている点があげられる。これは、宣教師や宣教団体の間に協力が成し遂げられなかったので、情報が不十分で、不必要な重複と競争、宣教資源の浪費などの副作用が続いている。

またこれまでの宣教のやり方に反対する韓国宣教師もいる。彼らは韓国教会が在中同胞と協力の中で多くの失敗と試行錯誤があったと認識している。中国の事情を良くわからないまま、熱意だけを持って宣教すると、むしろ中国朝鮮族教会に韓国式の宣教方式を強要し、中国朝鮮族教会に混乱とダメージを与えてきた。在中朝鮮族を協力のパートナーとして尊敬せず、手下のように働かせたことも少なくない。

また、最近中国朝鮮族に対する韓国人の詐欺事件が多く報道された。例えば、朝鮮族に韓国への出稼ぎを持ちかけ出国経費を騙し取る事件や、韓国で就労中の朝鮮族に対して、不法在留につけ込んだ賃金未払いや労災未保障、中国への送金の詐取といった事件が後を絶たず、被害を受けた朝鮮族の中には、巨額な負債によって一家離散や自殺に追い込まれるケースも存在した。このようなことは韓国教会の他文化圏への宣教が、精神的な面でも未熟な段階であったことを示すものである。

韓国教会は、それ以外にも宣教の方針を統一せずに物品を援助したため、教会をつくることが無理な場合もあった。今も韓国教会は、中国の三自教会を無視して、共産党に追従する御用

教会にする傾向もある。しかし、中国教会に対する正しい認識しないと中国に暮らしている200万の朝鮮族同胞と朝鮮族教会について正しく認識できず、また、韓中両国の間の交流も不可能である⁵⁾。

6. 終わりに

本研究では、韓国教会による朝鮮族への宣教の意図、その方針などについて検討してきた。韓国教会の宣教意図・目的は、同じ民族に福音を伝えるということだけではなく、北朝鮮地域と中国への宣教に関心があることが考えられる。朝鮮族の宣教は韓国教会が中国宣教と北朝鮮の宣教を行うためにきわめて重要であると認識されている。そのためか、韓国教会の中国宣教は朝鮮族に偏重している。

韓国教会は朝鮮族宣教が進展するような方針を模索し、採用している。それらの方針は朝鮮族教会が健全な教会になることを目指しており、今後大きな効果を発揮するとみられる。

一方、韓国宣教師の中に今の中国宣教のやり方に反対する韓国宣教師もいる。その観点は、中国の事情を知らずに宣教することが中国朝鮮族教会に混乱とダメージを与えることや、中国の「三自教会」を無視する傾向があることを指摘している。このように、韓国キリスト教会の宣教方針は必ずしも統一されているわけではない。

[著者付記] 本研究の構成から完成まで、指導教官である中部大学国際関係学研究科の渋谷鎮明先生より多大なるご指導をいただいた。ここに記すとともに、感謝の念を申し上げたい。
(金龍范 中部大学大学院、国際人間学研究科・院生)

注

- 1) 中国では、1957年に民主諸党派や文化・教育界などを中心に起った体制批判を、ブルジョア右派思想として追及した。これを反右派闘争という。整風運動は、中国共産党の党員再教育運動で、朝鮮族には漢語学習運動が課せられた。
大躍進運動は、1958年-1961年に毛沢東の提唱で展開された大衆運動による経済建設運動。現実から遊離し、自然災害・ソ連の援助引上げなどもあり失敗し、文化大革命に至る党内対立の出発点となった。
- 2) 毛沢東は「武闘」せず、「文闘」しようという指導を行った。
- 3) 中国で、1966～1977年の文化大革命の時期に権力を振った江青・王洪文・張春橋・姚文元の称。76年毛沢東の死後逮捕され、裁判で死刑・無期懲役などの判決を受ける。
- 4) 筆者が韓国でインタビューしたある韓国人中国宣教師による。
- 5) 筆者が韓国でインタビューしたある宣教師の観点である。

参考文献

日本語

- 延辺朝鮮族自治州概況執筆班（大村益夫訳）
（1987）『中国の朝鮮族』むくげの会
- 韓景旭(2001)『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮族』中国書店
- 全信子「社会転換期における朝鮮族の婚姻観の変化について」(桜井龍彦編「東北アジア朝鮮民族の多角的研究」ユニテ 2004 pp185～194)
- 高崎宗司(1996)『中国朝鮮族 歴史・生活・文化・民族教育』明石書店
- 鄭雅英(1999)『中国朝鮮族の民族関係』アジア政経学会
- 林明鮮「延辺朝鮮族の離婚と国際結婚」(桜井龍彦編「東北アジア朝鮮民族の多角的研究」ユニテ 2004 pp195～218)
- 劉京宰「東北アジアの構図からみた朝鮮民族の流動と拡散」(桜井龍彦編「東北アジア朝鮮民族の多角的研究」ユニテ 2004 pp103～128)
- 中国語
- 《延辺朝鮮族自治州概況》編写組(1984)『延辺朝鮮族自治州概況』延辺人民出版社
- 《延辺政協文史資料委員会》編(1997)『延辺文史

- 資料』政協延辺朝鮮族自治州委員会文史資料委員会出版
- 吉林省政協文史資料委員会、延辺朝鮮族自治州政協文史資料委員会編(1993)『吉林朝鮮族』吉林人民出版社
- 金澤・金海鎮編(1988)『延辺文史資料』第五集政協延辺朝鮮族自治州委員会文史資料委員会出版
- 金澤・金海鎮編(1988)『延辺文史資料』第六集政協延辺朝鮮族自治州委員会文史資料委員会出版
- 金澤・金仁哲編(1993)『吉林朝鮮族』吉林人民出版社
- 国家统计局人口統計司編(1990)『中国人口統計年監』科学技術文献出版社
- 潘相徳(2003)『延辺与朝鮮辺境貿易發展研究』延辺大学修士論文
- 政協龍井県委員会文史資料研究委員会編(1988)『龍井文史資料』吉林省内部資料
- 楊魁孚主編(1995)『中国少数民族人口』中国人口出版社
- 朝鮮・韓国語
- イン・ビョンクク(1997)『朝鮮族教会と中国宣教』韓民族宣教政策研究所編(2001)『二十一世紀韓国と中国の教会と神学』韓民族と宣教
- 韓国キリスト教歴史研究所(1989)『韓国キリスト教の歴史Ⅰ』キリスト教文社
- 韓国キリスト教歴史研究所(1990)『韓国キリスト教の歴史Ⅱ』キリスト教文社
- 政協延辺朝鮮族自治州委員会編(1997)『延辺文史資料』政協延辺朝鮮族自治州委員会文史資料委員会出版
- 車光文(2000)『在中朝鮮族宣教の意味』総信大 学校・神学大学院 修士論文
- 第三世界神学研究所編(1990)『中国キリスト教と三自運動』
- 朴道翰(2000)『中国教会の現状と宣教の課題についての研究』協成大学校・神学大学院 神学修士論文
- 柳英蘭(2000)『中国宣教に対する歴史的考察と中国に対する韓国教会の宣教戦略』湖南神学大学・神学大学院修士論文

Propagation Activity in State of Yanbian Korea Group Self-Government of a South Korean Heritage and the Intention

Jin liogfan

State of Chinese Yanbian Korea group self-government ever contacted the Korean Peninsula, and a person / a thing was the area that came and went freely traditionally. After Korean War, China and Korea left antagonism on the system side, and, as for Korea group, relations with North Korea were close from Korea. However, interchange with Korea came to be performed on an unprecedented scale since China and the Korean diplomatic relations which was establishment in August, 1992, and Korean existence in Chinese Korea group society grew big. Penetration of recent remarkable Korea culture in particularly Yanbian in China and a Korean inflow will put Chinese Yanbian and Chinese Korea group in battle front of middle Korea private enterprise interchange in that. The remarkable example is propagation activity to China of Korean Christianity propagator in the area again, and they help "a North Korean asylum seeker" from North Korea, and this propagation activity attracts attention some other time by local, doing various supports.

I clarify the characteristic about Korean propagation activity in private enterprise interchange with Korea in State of Chinese Yanbian Korea group self-government in this study concretely and, with that in mind, examine intention / a policy of the propagation of a South Korean heritage. I leave here and clarify middle Korea private enterprise interchange through religious activity and shall want to think about the prospects of Korea interchange out of a thing of the future.

A Korean carried various religions with a Korean liberation ago and emigrated to Yanbian, but it was Christianity that was rather transmitted from the West that was affected by most. After liberation, Manchurian Korean heritage became a Korea group heritage, and the Korea group believer which stayed succeeded to Manchurian Korean church, but it was prohibited, and the public religious activity was almost impossible for various reasons.

The rebuilding of a Korea group heritage began in 1979 after liberation from reform, but it appears to have begun the propagation of Korea group in earnest after it was in 1990, and there is Korea church.

Korea propagators contacted a Christian through one's relative from 1979 and it was formed and assisted a fund and a talented person and, through this network, taught a Korea group church to grow up and I was big and contributed to the reopening of a heritage of Chinese Korea group, revival, growth. A Korea group "Sanji" church of State of Yanbian Korea group self-government grows up rapidly now, and, in the Christian reopening of Chinese Yanbian Korea group, Korean existence grows big.